

# 第152回 わかるように伝えていきますか

坂井 聡

## 子どもが減っているのに、なぜ不登校は増えるのか

これまで見てきたように、最近、大学では障害のある学生が増えており、それに合わせて学生一人ひとりに合った支援、いわゆる合理的配慮も少しずつ整ってきました。これは、これまで学ぶことが難しかった人たちにも大学で学ぶチャンスが広がってきたという点で、評価できることだと言えるでしょう。ところがその一方で、小学校や中学校では学校に行けない子ども、すなわち不登校の児童生徒がどんどん増えています。言い換えれば、学校という場で学ぶチャンスを得られない子どもが増えているのです。不登校の数はこの十年間で過去最多を更新し続けており、特に中学生の増加が目立っています。大学では学びの機会が広がる一方で、小中学校では学びの機会から遠ざかる子どもが増えているという、まさに逆の現象が同時に起きているのです。

少子化によって子どもの数、つまり学齢人口は減り続けています。それなのに不登校が増えるというのは、一見すると矛盾した現象です。この背景には、学校教育に潜むいくつかの心理的・社会的なリスクが関わっていると考えられます。

第一に挙げられるのが、格差の広がりです。学力の差や経済力の差、そしてそれにとまなう子育ての不安が、子どもが学校生活を送るうえでの心の負担を大きくしている可能性があります。厚生労働統計協会が公表した「不登校発生に関連する家族要因の検討」によれば、世帯年収が200万円未満の家庭で最も不登校になりやすく、逆に600万円以上の家庭ではそのリスクが大きく下がるとされています。文部科学省の「不登校の要因分析に関する調査研究報告書」でも同じような傾向が示されており、授業料や教材費、給食費を補助する就学援助を受けている子どもは、そうでない子どもに比べて不登校になる可能性が約4倍高いと指摘されています。このように経済的な格差は不登校の一因として確かに大きいものですが、それだけが原因というわけではありません。

第二に、デジタル・リスクが日常化したことも見逃せません。いじめや仲間はずれが、SNSを通じて24時間つきまとうようになり、学校の外にも逃げ場がなくなりました。その結果、子どもは学校そのものを避けるようになり、不登校につながりやすくなっているのです。

第三に、選択肢の増加と文化の変化も一因と言えるでしょう。多様な価値観が広がるなかで、フリースクールや教育支援センター、オンライン学習などが受け入れられるようになり、「学校に行く」という絶対的な義務でも、成功の条件でもなくなりつつあります。この文化的な変化が、「学校に行かない」という選択を、統計上の不登校として表に出すことになっているのです。

このように不登校の要因は多岐にわたりますが、発達障害という観点から見ると、学校が子どもに求めることの厳しさこそが、発達障害のある児童生徒の不登校の大きな原因だと主張する研究者もいます。発達障害のある子どもの場合、定型発達の子どもの場合に比べて環境的な要因の比重が特に大きく、それが「発達障害のある子の不登校」と「定型発達の子の不登校」の最大の違いだとされています（本田 2025）。つまり、その子が通う学校の環境が本人にとってなじみやすいものであるかどうか、きわめて重要なポイントになるのです。皆さんが関わっている学校は、発達障害のある人のことを考慮した環境になっているのでしょうか。どうですか？

～坂井 聡先生のご紹介～  
《プロフィール》

香川大学教育学部卒業。金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など、養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部教授。1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。自閉症スペクトラム支援士エキスパート、特別支援教育士スーパーバイザー、言語聴覚士。